研究のあしあと３

令和６年度　久美浜小学校研究推進部
令和６年 12 月 24 日

１１月２１日（水）５校時　校内研究授業
生活科「じぶんでチャレンジ大作戦」
１年生　授業者　淀　陽子

２年次研究発表では、１年生の研究発表を淀先生にしていただきました。本当にお世話になりました。
生活科「じぶんでチャレンジ大作戦」は、日常の生活をふりかえり家族の一員として家族のためにできることを見つけていきます。
授業では、子ども達が家庭での仕事を体験した様子をわくわくした様子で元気に発表する姿を見ることができました。発表の表情から、自信をもって取り組んできた様子が伝わってきました。
その体験・経験から生活科における「見方・考え方」「気づき」などを通して、「自立」にむけて一歩を踏み出すきっかけとなる授業になったと思います。本当にありがとうございました。

【研究主題とのかかわり】

「生き生きと表現し、主体的に学習する子どもを育成する生活科の創造」
～自分・人・地域がつながり、かかわる～

本単元の活動を充実させるためには、保護者の理解と協力が必要不可欠であり重要になる。子どもが家庭で主体的に学習していくためには、見守ったり励ましたりして支援をしてもらうように丁寧に依頼しておく必要がある。家庭で側面から支援をしてもうらことで、「やりたい」「できるかも」という思いから、自分にもできる自信をもち「もっとやってみたい」と次の活動の意欲につながるようにする。
また、家の手伝いの体験を通して、仕事の大変さやできたときの喜びを感じながらこれまでの感謝とともに自立へ向けての力をつけていく一歩につなげたい。
一人一人の願いや思いを大切にし、生き生きと表現できるように、タブレット(動画・絵・写真)や実物を使うなど様々な表現方法を選べるようにしたい。

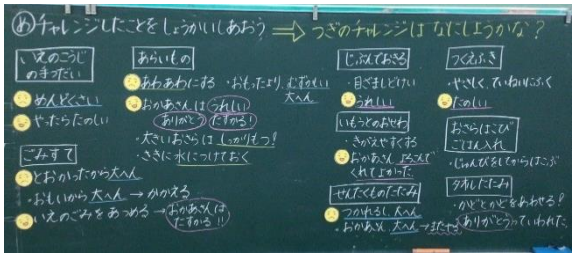
【事後研究会】　11 月 21 日（木）

参観の視点①　※11 月 21 日の事後研と校内のグループ研のふり返りになっています。
(授業者主体の授業になるための学習方法、支援はどうであったか。単元の流れも含めて)

- ワークシートに保護者や先生からのコメントがあって、子どもは自信をもって発表できていた。次の頑張りにつながっている様子を感じた。
- 担任の先生が質問を促し、子ども同士の関わりをもてるように声掛けができていた。
- 子ども達は自分の写真を嬉しそうに見せ、生き生きと発表できていた。しかし、先生対子どもになっている時間が多かった。グループでの発表・ロイロで共有などもっと子ども達にゆだねてもよいかなと思った。
- まとめでは、自分が次にしたいことを言葉にできない児童もいたが、イメージや見通しができていた。

参観の視点②

（それぞれが自分の課題を持ち、主体的に動いていたか。）



- 家族との関わりから仕事をする実感・自覚が高まり、より家庭の仕事と関わろうとする態度が発表から高まっていた。
- 仕事の内容もその子にあったレベルでできているところから自分で考えて積み上げてきた結果が今回の授業発表につながっていた。
- 教師が子ども同士をつなげるも大切な「気づき」となるが、子ども同士の交流から新たな気づきもあれば子どもなりの気づきの質が高まったかもしれないと感じた。

研究協議事後研「協議の柱」〈いきいきと表現する児童を育むために〉

- 写真や絵だけではなく動画を撮っていたものは効果的だった。
- 子ども同士をつながり（タブレット・ロイロ・グループ）を高めるための手だてとして何を使い意欲的に活動させるのか。
- 今回の単元は、人数や学級の実態に合わせて単元の計画を立てていく必要があると感じた。

授業者より　※単元を終えてから事後研で学んだことや新たに実践したこと、その後の学習について。

- 「チャレンジ大さくせん」は、期間は決めているが、内容や取り組む回数など自分で決めて取り組める（選べる）ようにしたことで、“やらされている”のではなく、“自分がやりたいと決めたことをやる”ことができたのはよかった。個人差があり、授業の時に自信満々に発表できた子もいれば、チャレンジ期間が終わってからようやく楽しくなり、続けて取り組む子もいた。
- 今回の授業では、すでに児童が休み時間に交流していることもあり、子どもたちが本当に生き生きとしているところは見えにくかった。「チャレンジしたことを友だちと交流して、色々な気付きの中から、次のチャレンジを決める」ということは、家庭ではなく学校でできる良さであるため、指導案通りにいかなくても、もっと児童の気付きを引き出させる工夫をしなければいけなかった。

授業を終えて～今後にどのようにつなげるか～

〇研究発表について（どこの授業を見てもらうのか・どこをみせるか）

今回の研究発表では、自分達の家庭の仕事（写真・動画・ワークシートなど）を授業前の朝休みに子ども同士で見せ合ってしまっていた。そのため、授業では担任も子ども同士がもう内容を知っている状況はわかっていた。しかし、指導案の本時の内容もあるためそのまま授業に入ってしまった。授業では、同じような話を聞くことで反応も薄く子ども達も新鮮さが欠けていたように感じた。生活科は、授業だけでなく生活全般で自立への力を培っていく。そのため、授業だけではなくそれ以外の活動をみてほしい思いが授業者にはあった。しかし、どこをどう見てもらうのかは今後検討していかなければならない。

生活科の単元計画を考えたとき、その日の子ども達の動きによって授業進度も変わってくる。そのために今回（朝休み・中間休みに子どもたちで進めてしまう）のように本時で指導案を考えても当日の状況によって、本時と違うところを見てもらうほうが、子どもたちの「いきいきと学習に向かう姿」を見ることができる。

本時の指導案を具体的に書くよりも、授業進度のよってどこになってもいいように少し深めた単元計画を準備しておくことも検討する。

（付けたい力）
・聞く・話し方・観察の仕方・交流　これまでの経験をつなげていく。
（子どもたちの視点）
・友達と交流し合い、探検しながら学んでいく。自分の思いを伝えられるように考えながらしていく。

研究授業のまとめ

今回の単元では、家庭の仕事を個々のレベルに合わせてチャレンジを繰り返し、友達のチャレンジから真似たり自分の仕事を見直したりする中で積み上げてきた成果を見ることができた授業だったと感じました。低学年では、支援する側面からどのように手だてを考えていくのか、丁寧に準備と計画性をもって進めていくことの大切さも学ぶことができました。

しかし、その中で「どの授業を見てもらうのか」「指導案の作成」など考えていかなければいけないとも見えてきた。子ども主体に授業計画を進めたいが１年生という学年から、どこまで子どもにゆだねるのかは難しい判断になります。自分の考えを伝える力や表現する力を高めることが生活科を通して自立への一歩につながっていくのではないかと感じました。